

ほあけぼのちいあ の 「つれづれのまま」

たわごと「悟りをひらく」

お釈迦さまは 35 歳で悟りをひらいたという。
悟りをひらくとは煩惱を断つこと、煩惱とは欲。

もとより、お釈迦さまとは比ぶべくもないが小生も最近喜寿近くになって悟りがひらけた気がする。こちらの煩惱を断つの煩惱とは望み・期待。

2015/01/25 17:30頃、突然手摺りにしがみついていなければ立っていられなくなり、人の肩によりかかるだけでは歩けない。目は見えたし意識はしっかりしていた。(つもり) 傍にいた人に救急車を呼んでもらう。

多分 ICU 室、医師の「出血」「入院」の声、脳卒中(小脳の出血) だった。

2~3 日経った頃ベッドで点滴を受けている自分に気がつく。山の神曰く「その間もよく喋っていた」と。まるで何年か前に経験の「一時全健忘症」みたい。

医師は「入院 3~6 カ月、退院後は車椅子」と。身体はフラフラ、目の焦点は左右ずれていてまるで 3D メガネをかけているようだった。困ったことになっていた。

それでも、20 日経ったら目の焦点が合ってきたと時を同じにして早めの退院となった。今までの真正直と真面目な性格に加え節制と規則正しい生活習慣の賜物か。

通常このてのものはリハビリ病院へ転院らしいが、候補の一つのリハ病院は満室、もう一つの方はこの程度の症状の病人は退院してもらうのだと、幸か不幸か 2/12 自宅へ。退院時の注意点は、防寒をしっかりとすることと転ばないことの二つ。

下手の横好きでやっていた G (ゴルフ) T (テニス) S (スキー) は全くダメ。

暫らくして介護認定を受けて通所の後遺症快復のリハビリを開始。

リハビリに通って少しすればまた直ぐにでも良くなって GTS をやれると思っていたが。

さらに 8 月になって、左手が半身不随状態に、肩が上がらない指が曲がらない、統合性局部疼痛症候群という訳のわからない名の病名が付く。ありていに下世話な言い方をすれば「かたわ」

本題はこれから。

リハビリというものは医薬を使わないで機能の回復のために行う鍛練的なものと思っていた。スポーツ選手が怪我をしたとき、現役復帰のために辛くとも我慢をしてやるような光景を描いて。

楽しみな GTS がまた出来るならと辛さを覚悟してのぞ(望)みをもつてのぞ(臨)んだ。しかし続けること 1 年経った今も辛さはなかったものの一向に良くならない。

リハビリというものは機能の回復のために行うものではなく、機能の低下を緩やかに抑えるものであるということと悟った。

車でいうなら、いかれたエンジンを直すのではなく車体やブレーキがこれ以上にいかれないようにする緩和療法だと。

リハビリ 1 年、リハ仲間の多くの方は 5 年も 7 年もの人たちがザラ。「まだまだこれから」である。

お墓も戒名も用意がしてあるのだが使うのは先送りしたい。

「菱の実だより」に訃報を載せていただく前に喜寿とか米寿の報を載せていただきたいと。

会員の中や世にはもっともっと大変な思いをされている諸兄弟がおられることと、更に目や耳や口などなど不自由で苦しんでもっともっとつらい思いをされている方達が沢山おられると思うのだが・・・。

手紙などの常套句として「お身体には気を付けて」と言っていたのを恥じている。

おわり。